

公益財団法人

平成25,26年度パナソニック教育財団特別助成研究

**「個々の発達課題に対応する
教材データベースの構築とネットワーク化」**

～インクルーシブ教育システムと

学校のセンター的機能を踏まえて～

中間報告

I, はじめに

昨年度までの研究では、自立活動を中心にその指導を充実させるための方策について検討を重ね、その中で幅広い視点で自立活動を考えていくことやアセスメントチェックリストを活用して客観的評価に基づく実態把握の大切さについて研修することができた。また、パナソニック教育財団の一般助成を活用し、ICTを活用したデジタル教材の開発や教材データベースの作成、さらにはホームページでの公開へと研究を進めることができた。

これら研究成果について全国肢体不自由教育研究協議会全国大会での発表や本校での研究発表会を通して報告したところ、大きな反響を得ることができた。また、特別支援学校の教員だけでなく、学校見学会などで来校される特別支援学級の教員や就学前の施設、卒業後の施設職員からも「これらを公開し活用できるようにしてほしい」との依頼を数多く受けた。特に教材教具データベースについては、すぐに活用できるツールであり、充実と公開の要望が強かった。

そこで本年度よりパナソニック教育財団の特別助成を受け、2年間の研究の中で教材データベースを中核とする地域支援ネットワークシステムの構築を目指すこととした。個々の実態に即した教材は、インクルーシブ教育システムの中で、その子とやりとりするための具体的ツールとして活用できるものであり、ネットワークシステムは学校のセンター的機能につながるものであると考えている。(図1)

研究推進に向けての校内体制

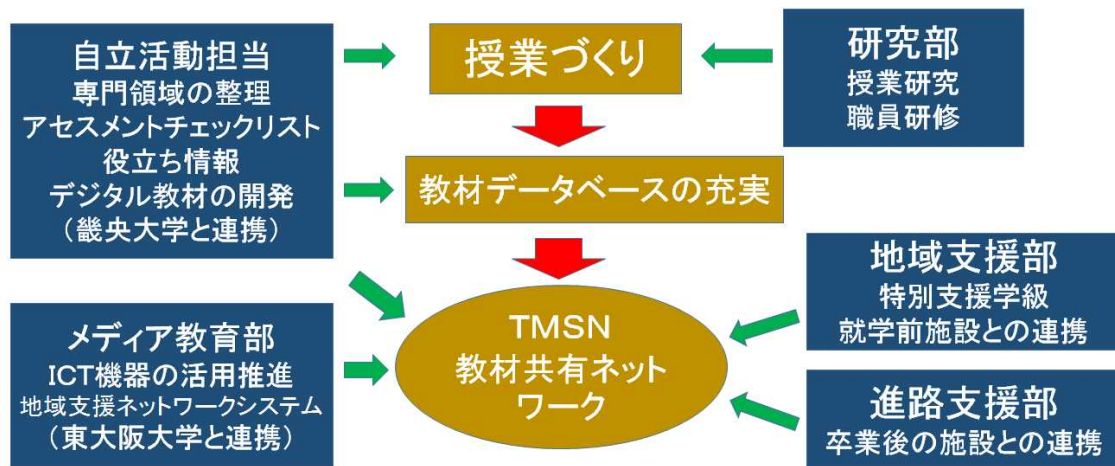


図1

実際に進めるに当たっては、数多くの課題がありどのように解決していくことができるのか、手探り状態で取り組んできたことも多い。今回取り組んできた課題をまとめると次のようになる。

- 1, 教材・教具データベースの充実
- 2, デジタル教材の開発
- 3, 地域の特別支援学級との連携
- 4, 地域の就学前施設との連携

5, 地域の卒業後の施設との連携

6, ネットワークシステムの開発

1年を経過して、すべてが順調に進んでいるわけではなく、やっとスタートラインに立てた課題もある。今回の研究成果が、きちんと本校教育の中に活かされていることを念頭に置いて進めていきたいと思っており、さらにはネットワークを通していろいろな学校や施設で子どもたちの生活や学習の役に立てるようになることを願っている。

そのためには、多くの学校や施設、子どもたちが関わる機関や家庭との協力が不可欠となってくる。多くの方々の協力の下、地域支援ネットワークシステムが真に役立つものとして育ってくることを願いながら、本年度の研究をまとめる。(図2)

TMSNの地域支援につながる充実について

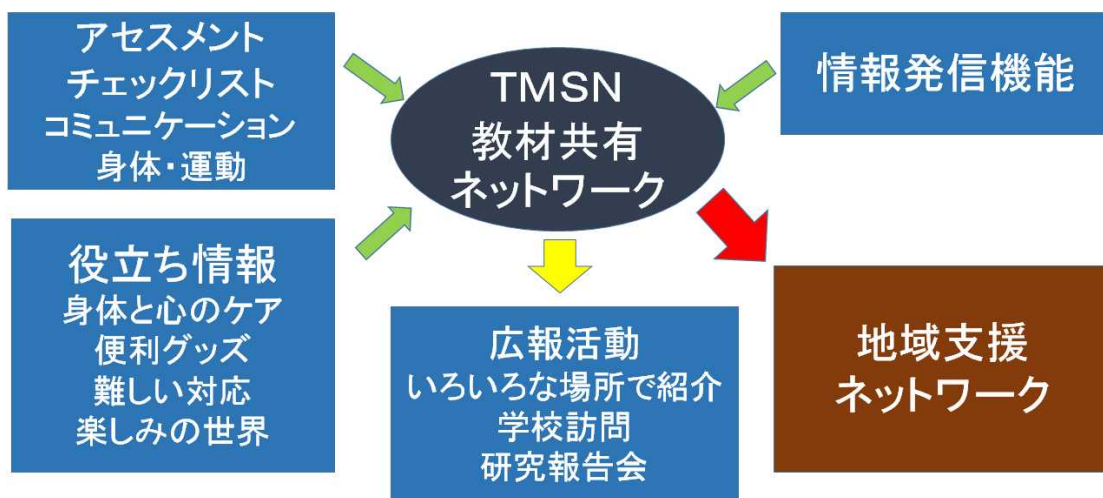


図 2

新規登録 | ログイン



II, 教材・教具データベースの充実

本年度、学校全体で取り組んだ研究は「確かな学びを育む授業づくり」であり、児童生徒にわかりやすい授業、学びを積み上げていくことのできる授業づくりを目指した。その際、どのような教材教具を使っていくのかにも考えが及び、数多くの新しいアイデアが生まれてきた。教材開発が目的の授業検討ではなかったが、子どもの課題や授業の内容の検討の中から生まれてきた教材は、使いやすい点、分かりやすい点などで工夫されており、実用性の高い物であった。まだ、すべてがデータベースに組み込まれているわけではないが、そのいくつかについて紹介していきたい。

1, 新たに開発した教材・教具

① ぐらぐらスティック（感覚入力水準から感覚運動水準）



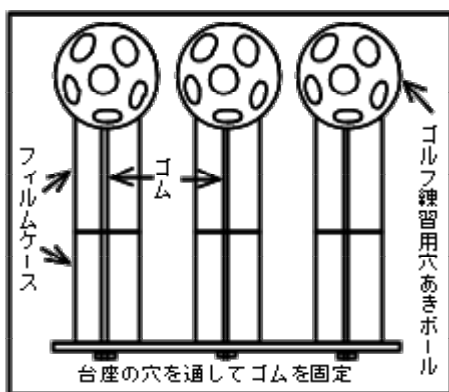
○教材のねらい

音や感触への気づき、自発操作、因果関係理解、視線誘導、簡単な目と手の協応

○使用上の注意点

興味を引きやすく、音と動きがつながりやすい。反面終点が明確でなく、循環的に刺激を楽しんでしまい、自分の世界に入り込みやすくなる。

○作り方



穴あきボールにカッターで切れ目を入れ、中に小さな鈴を入れる。穴にゴム紐を通して2重にする。フィルムケースの蓋ごと縦にドリルで穴を開ける。それを二つ重ねる。上のケースは蓋を取り、その上にボールを乗せる。2重のゴム紐を2つ目のフィルムケースの穴を通して、台座の穴を通して、その下で止める。ぐらぐらする度合いはゴム紐の引き具合の強さで調節する。台座に固定しないで手に持って使うことも可能。

○使い方

教材に手を伸ばしてくる子どもに対しては、見やすく触りやすい場所に固定しておくと、自分からさわりに来て動きや音を楽しむようになることが多い。手が出にくい子どもに対しては、動きを見せたり鈴の音を聞かせたりして楽しみ方を伝えていく。

両手を使える子どもの場合、両端の黄色と赤を両手で持って合わせて振る動きがしやすい。音と手に伝わる固有感覚の刺激が楽しいのか、だんだん激しく振るようになり、循環的自己刺激的活動に至ることも多い。はじめは自分で操作して楽しむことを目標にある程度の入り込みも必要であるが、入り込みすぎるようであれば、動きを止め気持ちをリセットするような対応も必要となってくる。

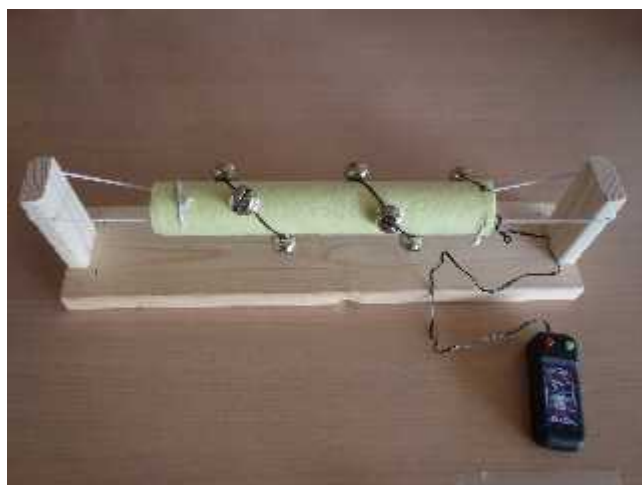
実際に使っている様子を見ていると、最初は握って振るときに目が宙を向いていた物が、次第に手元を見るようになってくる。単なる感覚遊びから目で確認しようとする行動の表れと考えている。その内に、見ながら動きを止めてみたり激しく振ってみたり、動かし方を変えてみたりといった探索的な行動が見られるようになる。

両手で持ちながら真ん中に持っていない物があることに気づくようになり、赤や黄色のボールを白に当ててみたり、手を離して白に持ち替えてみたりといったこともでてくる。

さらに進むと倒しておいて離すと元に戻る様子を見たり、両側に開いて同時に手を離したりするなど、遊び方に変化が見られてくる。

感覚遊びから探索遊び、目と手の協応といった使い方の流れが確認できるが、終了の設定が難しいため、飽きたらやめる疲れたらやめるという状況に陥りやすい。違う物を提示して自分で終わりを作ったり、「終わるから手を離して」と教材を持ち上げながら自分から手を離すのを促したりするといった工夫も必要である。

② 振動する鈴つき握り棒 (感覚入力水準から感覚運動水準)



○教材のねらい

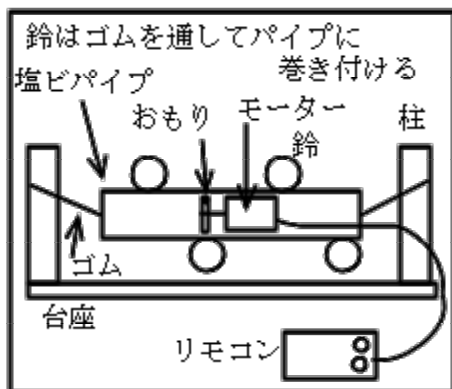
音や感触への気づき、対象への手のばし、因果関係理解、視線誘導

○使用上の注意点

音や振動に気づいたり集中しやすくするために、外からの刺激の少ない静かな環境が必要。

○作り方

水道の配管用塩ビパイプを20cm程度に切り、その中に振動を



起こすためのモータを入れ固定する。外側は感触を柔らかくするためにフェルトの生地を貼り、その上に鈴をゴム紐を通して螺旋状に巻き付ける。塩ビパイプの両端に穴を開けて設置用のゴム紐を取り付ける。写真のような台座を作り握りやすいようにゴム紐でパイプを羽化して固定する。モーターとリモコンスイッチは、100円ショップで販売されているリモコン自動車の物を取り出して使っている。

○使い方

目がうまく使えず、どちらかといえば前庭感覚や固有感覚、触感覚での遊びが中心の子どもに適している。スイッチを入れるとパイプが振動し鈴がなる。鈴や振動の音を聞いて手を伸ばしてくる子は、そのまま遊びに展開していくが、手がなかなか出てこない場合は、スイッチ操作で音に変化をつけたり、手を誘導してパイプに触れさせたりして気づきを促す。手で握ることになれてきたら、スイッチを入れたり切ったりしながら振動への気づき

から思い、興味へと展開していく。その際、刺激の変化を楽しめるよう言葉かけや雰囲気作りも重要となる。

スイッチのタイミングを合わせて触ると振動するという因果関係理解や触ると振動が止まるといった因果関係理解へと進めていくことができる。さらに興味ができて手の動きが活発になってくれば上げるとゴムが外れて自分に引き寄せることができることへの気づきやその操作を促すこともできる。

手で振動を感じたり、振って音を鳴らしたりしながら、手元に視線をもっていけるようになることもねらっていきたい。

③玉つかみ（感覚運動水準）



○教材のねらい

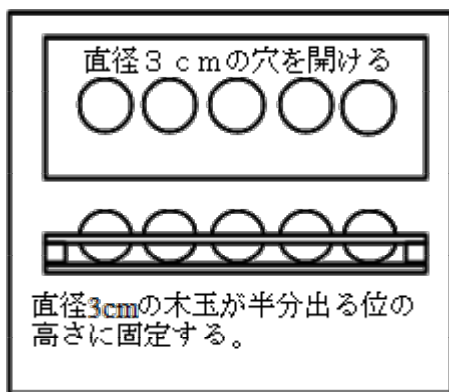
指先へ注意を向ける、指先を見る、力加減の調整、つまむ動作学習、つまめたという終点の理解

○使用上の注意点

玉を口に入れたり、投げたりして遊ぶ場合があるので注意が必要。

○作り方

木玉は 100 円ショップで購入。直径が 3 cm あるので、板に 3 cm の穴を開ける。その際、フォスナービットと呼ばれるドリル刃を利用すると簡単に作業できる。木玉が楽に入るように大きさを調整し、台座に取り付ける。台座の柱は 1 面をあけておき、板や厚紙を敷くことで高さの調整ができるようにしておく。柱の高さは木玉の半分が出る程度。



○使い方

入りやすいのは、物をつかんで落したり投げたりして遊ぶのな好きな子。最初は木玉を普通

の容器に入れ、その中から取って落したり投げたりして遊ぶ。遊びが安定してきたら、この台の中に薄いベニヤ板を敷き玉をつかみやすくした物に変える。遊びながら少しずつ底敷きを薄くしていき、つまみにくくする。つかみたい意欲があれば、繰り返しチャレンジしたりつまみ方を工夫したり、目がついてきたりする。落したり投げたりする遊びをうまくつまめたというできた感へと展開していければと思う。ちょっとがんばればできる高さが学習を続けることで、集中力や持続力を高めていくことにもつながればと願っている。

このような教材・教具が開発されているが、現状ではデータベースにまだ載せることができていない。データベースへのアップが簡単にできるような工夫も検討しながら、デー

データベースの充実を図っていきたい。

2, アセスメントチェックリストとの連携

アセスメントチェックリストは、昨年度までの研究で「認知面」「コミュニケーション面」「動作面」について作成してきた。「認知面」については、チェックリストから発達水準を出し、その水準に該当する教材で学習を進めるというデータベースとの連携が図れるようにできている。現在は「コミュニケーション面」について、指導内容の整理を始めており、アセスメントチェックリストとつながりのあるものとしてきたい。

「コミュニケーション面」のデータベースは次のようなものである。これは、「LC スケール」を参考とし、そこに示されている初期課題についてそれぞれにその前後課題を設け3段階としたものである。

アセスメントチェック表(コミュニケーション)

課	課題項目	チェック項目	評価
1	対人的微笑	(一)外界との関連は明確ではないが、時折笑ったりほほ笑んだりする。	
		他者からのほたらきかけに対して、笑ったりほほ笑んだりする。	
		(十)関わり手の方向へ顔や視線を向けたり、期待したりして、笑ったりほほ笑んだりする。	
2	人の顔の注視	(一)条件(視野を限定する・声かけをしながら 等)を工夫すれば、ほんの数秒でも視線を合わせる。	
		5秒以上視線が合う。5秒未満でも、すぐに視線が大人に戻る。	
		(十)視線が合った状態で大人が顔を動かすと追従する。	
3	快・不快の声をしわける	(一)快, 不快時に何らかの発声がある。	
		快, 不快, 各々1種類以上の声を発する。	
		(十)人を呼ぶ, してほしいことを伝える等の要求を声で表す。	
4	ぬいぐるみの追視	(一)光ったり動いたりする物を追視する。	
		ぬいぐるみを追視する。	
		(十)上下左右への追視ができる。	
5	音への反応	(一)突然の音に驚いたり、泣き出したりする。	
		鈴の音に対して体の動きをとめたり、目を動かすなどの反応を示す。	
		(十)大人が後ろから呼びかけると振り返ろうとする。	
6	「いないいないばあ」遊び	(一)「ばあ」と出した大人の顔に気づき、驚いたり注視したりする。	
		「ばあ」と顔を出すと喜んだり、自分で「ばあ」と声を出したりする。	
		(十)大人が顔を隠した手を開かないでいると、開けようとしたり、自分から「ばあ」と声を出したりする。	
7	音節の連鎖	(一)短く切った声を出すことができる。	
		2音節以上をつなげて言うことができる。同じ音節の反復可。	
		(十)長音・短音を含めて2音節以上をつなげて言うことができる。	
8	共同注意(1)	(一)大人が注意をひくアクションをすると、顔を向けて見ることができる。	
		子どもが指さしの方向を見る。	
		(十)大人が指さしの方向を見続けていると、その方向と大人の様子と	

		を、見比べながら見続けることができる。	
9	他者の手の動きの模倣	(一)手を振る、拍手をするなど、見て覚えている動作を自分のタイミングでする。	
		大人の手の動きをまねるような動作をする。	
		(+)大人が見せた動作(コップで飲む動作やはみがきする動作等)をまねて、同じような動作をすることができる。	
10	身振りなど非言語的コミュニケーション	(一)表情、視線、動作など、何らかの方法で気持ちを表現する。	
		大人のモデルなしで子どもが自然なジェスチャーを用いる。	
		(+)「バイバイ」や「ちょうだい」などジェスチャーの意味を理解して、いくつかの思いを視線や発声、動作で表現することができる。	
11	物を見せる・手渡す	(一)「どうしたの」「見せて」などの声かけがあれば、持っている物を見せたり、渡したりする。	
		物を持っている手を伸ばして大人に見せたり、持っている物を渡す。	
		(+)「ありがとう」の言葉等の相手の反応で、さらに見せたり、渡したりする。	
12	自発的指さし	(一)要求したり、相手の注意を引くために、何らかの動作(手を伸ばす、つかむ等)をする。	
		要求したり、相手の気を引くために、自分から指さしをする。	
		(+)指さしを頻発して、大人の注意を引いて遊ぶ。	
13	人を呼ぶ	(一)声は出さないが、じっと見つめたり、手をたたいたりして音を出す。	
		声を出して人を呼ぶ	
		(+)特定の言葉や名前を使って人を呼ぶ	
14	コミュニケーションツールの活用	(一)現物を使って直接的表現をする。	
		イラストやシンボルを使って思いを表現する。	
		(+)文字盤やトーキングエイドなどの電子機器を活用して伝える。	
15	発声(表出)	意図的に声を出して思いを表出することがある。	
		いくつか違う音の声をだすことができる。	
		声の大きさやトーンの違い等で、意図的に複数の思いを表現する。	
16	発音(聞き取り)	初めての人でも、2割程度、言葉として聞き取ることができる。	
		初めての人でも、5割程度、言葉として聞き取ることができる。	
		初めての人でも、ほぼ言葉として聞き取ることができる。	

それぞれの項目は、3段階で評価するようになっているが、その中央にあるものが「L Cスケール」からの引用である。これらの項目をチェックすることによって、コミュニケーション能力を評価していくことになる。単なる評価で終わらせないために、それぞれのチェック項目に対して、その項目がうまくできない場合に、指導や対応のヒントをデータベースで調べることができるようにしていきたいと考えている。

アセスメントチェック表(身体・姿勢・動作)

簡	首が据わっている	基本的操作・動作
---	----------	----------

単	一人で寝返りができる	移	臥位で身体をずらすようにして移動する
チ	一人で安定して座ることができる	動	座位で身体をずらすようにして移動する
エ	一人で安定して立つことができる		手ばいで移動する
ツ	一人で安定して歩くことができる		四つばいで移動する
ク	応用歩行を安定してすることができる		車いすでの自走ができる
	基本項目		車いすでの実用的自走ができる
食 事	スプーンで食べる	歩 行	安定した立位ができる
	はしで食べる		補助や補助具があれば、歩くことができる
	容器をもって食べる		片方の足を前に踏み出すことができる
	コップで水を飲む		数歩ならば歩くことができる
	食べ物がきたら口を開ける		姿勢は悪い(不安定)が歩くことができる
	スプーンを抜くとき、口を閉じることができる		平地であれば安定して歩くことができる
	咀嚼ができる	応 用 歩 行	高さ5cm程度の障害物をまたぐことができる
	口を閉じて咀嚼ができる		手すりがあれば、階段の昇降ができる
	口を閉じて嚥下ができる		手すりがなくても、階段の昇降ができる
首 の コ ン ト 一 ル	仰臥位で頭を左右両方に動かすことができる	歩 行	片手に荷物を持って歩くことができる
	腹臥位で頭を左右両方に動かすことができる		後ろ向きに歩くことができる
	パピーポジションをとらせると頭を起こすことができる		駆け足ができる
	仰臥位から両手を持って引き起こすと頭を起こす		基 本 的 日 常 生 活 動 作
座位姿勢で頭を起こすことができる	椅子から立ち上がる		
座位姿勢で頭を起こしたままできる	床に腰をおろす		
座位姿勢での頭部の前後左右への立ち直りができる	床から立ち上がる		
顔を回転方向に向けることができる	その場で回る		
寝 返 り	仰臥位から側臥位まで動くことができる	生	台の昇降(10cm)
	仰臥位から腹臥位まで動くことができる	活	床上の物を拾い上げる
	腹臥位から仰臥位まで動くことができる	動	しゃがむ
	腹臥位から仰臥位まで連続して動くことができる	作	しゃがんだ姿勢から立ち上がる
	連続して寝返りしながら移動することができる		バスの乗り降り
い す 座 位	援助すれば座位姿勢がとることができる		自動車の乗降
	不安定だが何とか一人で数秒程度なら座ることができる		
	一人で何とか数十秒程度座っていることができる		
	一人で座位を保持(数分以上)することができる		
あ ぐ ら 座 位	前後左右の傾きに対して身体の立ち直りができる		
	援助すれば座位姿勢がとれる		
	不安定だが何とか一人で数秒程度なら座ることができる		
	一人で何とか数十秒程度座っていることができる		
座 位	一人で座位を保持(数分以上)することができる		
	一人で座位を保持(数分以上)することができる		
	前後左右の傾きに対して身体の立ち直りができる		

応用動作	更	前あきシャツの着脱
生 物を持って歩く	衣	かぶりシャツの着脱
活 つまんだ物をびんの中に入れることができる	動	ズボンの着脱
動 びんのふたを閉めることができる	作	スナップのかけはずし
作 ボタンのとめはずしができる		ボタンのかけはずし
鉛筆を握って書くことができる		紐を結ぶ・解く
本のページをめくる		手袋の着脱
手紙を折りたたみ封筒に入れる		靴下の着脱
ハサミで紙を切る		帽子の着脱
定規で線を引く		補装具の着脱
引き出しを出す	整	水道栓の蛇口を捻り、開閉できる
引き出しをしめる	容	歯を磨く
スイッチ操作ができる	動	顔を洗う
かぎをかける	作	髪をとく
かぎをかけるはずす		つめを切る
金槌でくぎを打つ		洋式便器が使える
はちまきをしめる		浴槽出入り
水を入れたコップを盆にのせて運ぶ		手の届く範囲で身体を洗う

これは、アセスメントチェック表（身体、姿勢、動作）にある項目だけを取り出した物である。これをチェックすることにより、身体や動作面での実態を確認することができる。いろいろなチェックリストを参考に本校独自で編成したものである。これらの項目の解説や指導についてもヒントになるような事項をデータベースの中に含めていくことができればと考えている。

3. 役立ち情報の掲載

幅広くデータベースの情報を活用してもらえるように肢体不自由特別支援学校ならではの生活の中での役立ち情報も紹介していきたいと考えている。特にこの部分は、家庭生活や卒業後の生活を意識しながら、そこでの充実につながりそうな内容を掲載していきたい。次のような4項目での構成を考えている。

(1) 身体と心のケア

学校では毎日のように身体について対応する時間があるが、家庭や卒業後の生活の中では難しいことも多い。身体をあまり動かさなくなることから、身体全体が堅くなってきたり、変形が見られるようになることもある。簡単にできるような身体のケア方法や身体が楽になることで気持ちのゆとりを生み出すような取組や活動を紹介していきたい。身体の次のような部位について整理する予定である。

(肩、腰、股関節、首、肘、膝、手首、足首、手指、足指のケアとFBの利用)

(2) 便利グッズ

多くの便利グッズが開発され市販もされている。学校でも個々に応じた補助具など

を多く開発してきた。それらの情報を掲載していきたい。

(3) 難しい対応

学校生活の中では、対応の難しい状態になったり状況が生じたりする。そうした場合の対応は一律にはいかないことも多いが、基本的な対応方法や個々の工夫点など学校の中で積み上げてきたノウハウを整理していきたい。ここでは次のような内容の物を考えている。

(パニック、誤嚥、発作、側わん、関節拘縮など)

(4) 楽しみの世界

余暇活動の充実につながる内容として、次のような活動を紹介していきたいと考えている。

音楽活動 (カラオケ、車いすダンス、演奏、歌、鑑賞)

ゲーム (パネル倒し、的入れ、引っ張りっこ)

4. 地域支援ネットワークシステムへ向けたニーズの調査

地域支援を考えるときに、まず地域がどのようなニーズを持ちどのような対応が可能なかを理解しておく必要がある。今回の教材共有ネットワークシステムにおいても、その内容を検討する際には、そうしたニーズへの対応を頭に置いて進めていきたい。

そのための具体的方策として、本校の地域支援部や進路支援部と協力し、特別支援学校、就学前施設、卒業後の施設の中でモデル校及びモデル施設を設定し、現場でのニーズや状況を調査するとともに、対象児を決め、ケース検討の形でより具体的で実際の支援のあり方についてまとめていきたい。

その際、重要と考えているのか単に情報を提供するだけでなく、その情報に接した人が「やってみよう」「がんばってみよう」と思えるような内容を組み込んでいきたい。そのためには、長期休業中に研修会を企画するなど積極的に取り組んでいく予定である。

Ⅲ. デジタル教材の開発

特別支援教育に限らず、現在教育界全体においてICTの活用が注目され、研究実践が進んできている。本校でも大型テレビやプロジェクター、タブレットPCやパソコン環境が充実してきている。ハード面での整備が進む一方、それを実際の教育実践に生かしてい



くためのソフト面での対応が求められている。本校ではソフト面の課題を、個々の学習課題に応じたデジタル教材(コンテンツ)開発とそれを開発し使いこなすための職員研修の二つに分けて考えている。

実際場面ではパソコンを使って授業を進めていくことになるが、その際、iPad系にするのかAndroid系にするのか、Windows系にするのかで

悩んだ。iPad は、タブレットとしての完成度の高さと安定性、ソフトの充実という点で魅力的であった。Android 系は普及率の高さが魅力であったが、操作がわかりにくいという印象があった。Windows 系はソフトや操作に慣れていることと、フラッシュやパワーポイントを使った独自教材の導入が楽にできる点で魅力があったが、動作が不安定になっ

どっちでしょう？



たり思わぬ反応が出てきたりして使いにくい点もあった。

現在は、どれかに限定するのではなく、子どもの実態や課題に応じて使い分けていくことで対応している。限定することで使い方の研修や機材を揃えること、保守管理がやりやすくなるというメリットがあるが、それぞれの機種の特長やデメリットを考慮しながら活用していくこととした。

デジタルコンテンツ、特にフラッシュ教材の開発については、3年前より畿央大学教授西端律子先生の研究室と共同で行ってきた。フラッシュコンテンツの開発は、製作が難しいことや時間がかかることで学校の教員だけで対応するには限界があった。教員のアイデアと研究室の学生さんの技術を合わせることで、効果的で実用的なフラッシュコンテンツの開発が可能となった。



IV、地域の特別支援学級や就学前施設との連携

地域支援部

1. 今回の取組の目的

地域支援部では、本校の重点課題としてあげられている「センター的機能の充実」に向けて、地域における肢体不自由教育の専門機関として情報提供や教育相談、関係機関との連携等を通して、地域の教育的ニーズに応えるために様々な取り組みを行っている。

教材開発や授業などで使っている教材について、データベース化に積極的に取り組み、ホームページ上で公開しているが、学校見学や教育相談でも教材への関心の高さを感している。

今回の取り組みでは、教材のデータベースを地域の小・中学校での授業や福祉関係施設での活動などで活用してもらい、情報交換などインターネットも利用しながらお互いに学びあい、日々の実践に役立てていく。本校の教育活動と地域との連携を深め、教材のデータベースを介した地域ネットワークシステムへとつなげていきたいと考えた。

本校と地域の学校、福祉関係機関が双方向でのやりとりをしていくことで、本校の目指す「地域に根ざした教育」に向けた取組としていきたい。

2. 初期の状況について

学校見学や教育相談、また地域の特別支援学級担任者会や学校内外での研修などいろいろな機会に教材のデータベースの紹介を行った。教材を見てもらったり、データベース紹介チラシを作成、配布したりして、いろいろな意見や感想を求めてきたものの、実際にどのように活用されているのかはほとんどわからないままであった。

個別に話をすると興味や関心をもっていることがわかり、ニーズも感じられるのだが、手応えがつかめず本校からの一方的な発信にとどまっているように感じられた。

3. 具体的課題と対応

- ・データベースの活用をどう発信していくか。
 - その場ですぐに見てもらったり、触れてもらったりしながら具体的に説明できるようにタブレット PC を活用する。

- ・「学びたい」気持ちはあるが、なかなか研修会などに参加できない。
- ・教育相談を受けたいが、人的、時間的な制約がある。
- ・具体的にどこに行けば、何を探せばいいのかわからない。
 - 本校で行われた研修などを研修用 DVD として作成し、ニーズに合わせて貸し出しをする。

- ・幅広く呼びかけても手応えがつかめない
 - モデルケースを設定する。
 - 地域小・中学校
 - 福祉関係機関（児童発達支援、放課後等デイサービスの事業所など）

4. 今後に向けての課題

- ・モデルケースの相手校、施設の担当者との個人的な取組、研究にならないように学校長を通して依頼をする。
- ・それぞれのモデルケースについて、研究にかかわって目指すところを確認する。
- ・地域からの発信の場としても取り組んでいけるように、年間計画を立てる。
- ・個人情報の取り扱いやプライバシーへの配慮も確認を取りながら対応していく。
- ・教育関係、福祉関係では、教材や活動などに対するニーズが違ってくるのではないか、と思われる。それぞれの場で活用しやすいような用語や活動内容などを考えていく。
- ・教材などの貸し出しだけに終わらないようにするために、学校や施設を訪問するなど、特に取り組み初めの段階では、本校担当者が相手先と必要な時に、ていねいに対応していくことができる校内体制作りが必要である。
- ・具体的な活動（研究にかかわって窓口は誰がするのか、やりとりの記録をどのようにしていくのか）について、地域支援部としての活動、分掌内での連携、自立活動担当との協力、メディア教育部との協力など、学校外だけでなく、校内での

役割調整が必要である。

- ・ これまでも地域支援部として地域とのネットワーク作りに向けた取組を進めてきている。それらと結びつけることで、研究だけにとどまらず継続していける活動にしていく。例えば、「夏の研修会」を今回の取組と関連させ、より地域のニーズに応える研修会として自立活動担当などと協力しながら企画、実施するなど。

V, 地域の卒業後の施設との連携

進路支援部

1, 今回の取組のねらい

進路支援部では高等部を卒業し、地域の施設に通所や入所をされている方々の、アフターケアを行っている。そこで個別に話を聞いていると、加齢に伴う二次障害が生じていることが分かってきた。

帰校後、卒業生の状況を伝え、学校としてどのように支援していくことがいいのかを考えた。その中で、研究部で自立活動の充実として取り組んでいる「身体への取組」を卒業生の取組みに活用することにした。地域とのネットワーク化を図る上でもこの「身体への取組」を提供し、支援者・利用者が共によりよく生活し、心地よく身体づくりができればと考え取り組んだ。

2, 初期の状況について

I 斑鳩町障害者支援センター虹の家

- ①通所施設で日中活動の内容は豊富である。身体への取組も行われているが、利用者の年齢層の幅が広く、同一内容の活動ではカバーしきれなくなっている。
- ②日常生活動作で自立していたことが、できにくくなってきた。

II 障害者支援施設フリーシュタッドなかがわ

- ①入所の施設で利用者の年齢層の幅が広い。身体への取組はなく、生活全般の中で取り組んでいる。
- ②日常生活動作で自立していたことが、できにくくなってきた。

3, 具体的課題と対応

I 斑鳩町障害者支援センター虹の家

- ①自助具（ファシリテーションボール、ビーズクッション等）を活用
利用者本人が取り組む内容と、支援者が利用者と共に取り組む内容を伝える。
- ②動作法を活用

本校職員で動作法のアドバイザーを派遣し、支援者に身体の動きの方法を伝える。

II 障害者支援施設フリーシュタッドなかがわ

- ①自助具（ファシリテーションボール、ビーズクッション等）を活用
利用者本人が取り組む内容と、支援者が利用者と共に取り組む内容を伝える。

4, 今後に向けての課題

- ・利用者の状況（ニーズ）の把握
- ・支援者の身体への取り組みに対するスキルアップ
- ・支援者への研修用 DVD の貸出制度
- ・定期的な巡回訪問

VI. ネットワークシステムの開発

メディア教育部

「ICT 教材とネットワークシステム」～教材共有ネットワークの構築～

－ Teaching Materials Shared Network －

1. 取り組みの目的

2010 年度から 2 年間、本校の研究の一つとして教材開発に取り組んだ際、以前から校内にあった自作教材や新たに作られた教材をどのように管理すれば教員が授業で使いやすいのかということが課題となった。その課題に対し、ホームページ作成ソフトの機能を利用して、校内にある自作教材をデータ化し、2012 年度から本校ウェブページ上で「教材データベース」と題し約 250 個の教材を検索、閲覧できるようにした。

本取り組みでは、その「教材データベース」を基に、新たな機能を追加し、地域の学校や事業所、本校教職員、他の特別支援学校や家庭が、それぞれ所有している教材や役立つ情報を、インターネットを利用して一カ所に集約し（アップロード）、さらには、それらの教材や情報に対してお互いに意見交換や質問できるウェブサイトの構築を目指す。このウェブサイトを「教材共有ネットワークー Teaching Materials Shared Network ー」（以下「本サイト」）と名付け、家庭学習、事業所での活動や各学校での授業に活かされることを目的とする。

2. 初期の状況について

本サイト実現のためには専門家の協力が必要であった。当初、大学や専門機関に電話やメールで直接交渉するも上手くいかなかった。そんな折、2012 年度から本校の教材開発にご尽力いただいている畿央大学教授西端律子氏から、東大阪大学准教授太田和志氏、同大学助教鴨谷真知子氏をご紹介いただき、両氏のご協力をいただけることになった。西端氏、太田氏、鴨谷氏、本校職員を加えた数名のチームで 2013 年 7 月より本サイトの共同開発を開始した。

3. 具体的課題と対応

ネット上での意見交換や情報交換の場となるサイトであるので、ユーザー登録制とした。互いの所属や立場を公開することで、安全でより実用的なサイトを目指す。職場などのパソコンからのアクセスだけでなく、近年普及しているスマートフォンやタブレットでも教材の検索・閲覧・アップロード、質問・意見の投稿などができるサイトにした。「スマホで教材の写真を撮影→そのまま本サイトにアクセス→アップロードする」そんな手軽さが今後、本サイトが広く使われるための条件であると考えた。その手軽さの反面、セキュリティマネジメントの強化について課題があり、サイト公開後はしばらくの期間、本サイト管理者が認めたユーザーのみを登録することとした。この課題につ

いては、まだまだ検討が必要である。

4. 今後に向けての課題

本格稼働後から随時本サイトの改善すべき点をどのように集約するのかを検討する必要がある。現時点でシステムの構造をすべて把握しているのは開発者である太田氏と鴨谷氏だけである。本校担当者に対して本サイトの操作研修の実施が早急に必要であり人材の育成が課題である。

また、本サイト運営で知り得た会員の情報の管理やアップロードされた教材の写真などの二次利用・加工に対するセキュリティマネジメントのさらなる強化も必要である。

そして、本サイトで集約したさまざまな情報を、「集約して終わり」ではなく、それらをどのようにサイトに反映するのか、その点について常に検討し対応していかなければならない。

5. 本サイト URL 「教材共有ネットワークー Teaching Materials Shared Network ー」

<http://www.narayogo.jp/n.org/>

